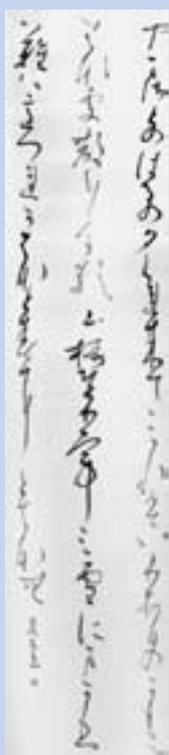


わたしの作品



【川端一丁目】
ひらいかつこ
平井克子さん

お姑さまは、書がとても上手な方でした。私も上手になりたいと思っていたところ、息子が書道を習いたいと言い、一緒に習い始めたのがきっかけです。もう三十数年も前のことです…。今回の作品は、受賞するとは思っていません。これも、ご指導していただいた先生や、教室の友達のおかげと感謝しております。



【書道】市展賞 山里の春の夕ぐれ

【写真】市展賞 Resort



【雲山】
なかにたによついち
仲谷洋一さん

白黒写真は、撮影から現像まで自分で仕上げる楽しさと、白と黒のバランスや微妙な色合いを出す難しさに魅力を感じます。この作品は、自分では納得のいくものに仕上がりましたが、写真に写っていないものを感じさせる作品作り挑戦していきたいと思えます。

市民図書館の司書が調べます

まちで見つけた「なんでだろう？」

白兔海岸にある「だいこくさま」の音楽碑が、「大黒さま」でなく「大黒さま」になっているの、なんでだろう？



うさぎの姿をかたどったこの記念碑は、岩美町出身の音楽家・田村虎蔵（明治六年〜昭和十八年）をしのんで、昭和四十年（一九六五）七月に建てられたものです。「大きな袋を肩にかけ…」という、碑面に刻まれた歌の正式な題名は「大こくさま」といいます。群馬県出身の石原和二郎が作った詞に田村虎蔵が曲をつけ、明治三十八年（一九〇五）十二月発行の『尋常小学唱歌』二の中巻に発表されました。石原・田村のコンビは、ほかに「金太郎」「花咲翁」

「うらしまたろう」など日本の昔話に題材をとった多くの作品を作っており、この歌も『古事記』に登場する因幡の白うさぎの神話をもとにしたものです。しかし、七福神の一人として知られる「大黒さま」は、もともとマハー・カーラと呼ばれるインドの神様で、おおくにぬしのみこと、大黒命とは何の関係もありませんでした。なぜ、無関係の二人の神様が混同されるようになったのでしょうか。平成八年（一九九六）に県立博物館で開催された特別展『大黒命と大黒天』の図録をひもとくと、平安時代に日本に伝わったインドの大黒天が、縁結びの神であり農耕の神でもあった大黒命のイメージと習合し、「福の神」として庶民の信仰を集めてゆく様子がよく分ります。最も大きな要

因は、両者の名前の類似にあったようです。「大黒」と「ダイコク」、さらに大黒命の別名である大己貴神もまた「ダイコキ」と音読できるところから、両者の一体化が進んだようです。毎年、たくさんの海水浴客でにぎわう白兔海岸。「大黒さま」の碑を、出雲の大黒命も苦笑しながら眺めておられるかも知れませんね。



印刷 株式会社鳥取平版社